

演劇研究センター 2005年度 報告書

早稲田大学21世紀 COE プログラム
〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

2006年3月20日

シンポジウム「千田是也—いま振り返る“新劇の巨人”」

秋葉 皆さま、本日はシンポジウム「千田是也—いま振り返る“新劇の巨人”」にお運びいただきまして、ありがとうございます。私、早稲田大学演劇博物館副館長の秋葉裕一と申します。本日の進行役を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。去る2001年、千田是也氏ご遺族の中川モモコ様から、旧蔵資料ということで演劇博物館に多量の貴重な資料をご寄贈いただきました。この資料の整理が一段落いたしまして、一般に利用できる運びになりました。そして、10月1日から12月15日まで演劇博物館本館において「千田是也展」を開催しております。これは千田是也文庫のお披露目を兼ねた企画でございます。演劇博物館の催しものは、大きく言って企画展示と講演の二本立てでございますが、今回は「千田是也展」の中心的なイベントとして、シンポジウムを開催することにいたしました。シンポジウムは全体が三部から成ります。お手元のプログラムにありますように、第一部講演、第二部朗読、第三部シンポジウムという構成です。さっそく第一部から始めたいと存じます。講師はドイツからお呼びいたしました、ベルリンのフンボルト大学附属森鷗外記念館副館長であられるベアーテ・ヴェーバーさんです。「千田先生とドイツとの縁（えにし）」ということでお話しをしていただきます。お話に先立ちまして、ヴェーバー先生とは昔からおつきあいのある早稲田大学法学部丸本隆教授にひとことご挨拶とご紹介をいただきます。ヴェーバー先生、丸本先生、壇上にお願いいたします。

丸本 それではヴェーバーさんのご紹介を申し上げます。これからお話しいただく講演の内容は、「千田是也との出会い」という、ヴェーバーさんの個人的な体験をとおして語られる、いわば日本現代演劇史の貴重な証言になるだろうと思われます。今日のお話は、そういうことでありますので、ヴェーバーさんご自身の自己紹介的なものもかなり含まれておりますので、私がご紹介申し上げることと重なってしまう部分が多くあるかと思いますが、この講演をよりよく理解していただくために、これから特にヴェーバーさんの「千田是也との出会い」ということに関して、5つのキーワードに沿ってお話していきたいと思います。

第1に「ベルリン」ということです。お生まれが東ドイツで、ベルリンの近くのグーベンというところでありました。1973年にベルリンのフンボルト大学に入学され、それ以来ずっとベルリンにお住まいです。このベルリンというのは皆さまご承知のように、世界的な演劇都市であります。千田是也が青年時代に演劇留学

した街であり、また千田是也が傾倒した演劇人ベルトルト・ブレヒトと深いかかわりのある街でもあります。20世紀の演劇革命の旗手であったブレヒトが、1920年代、50年代を中心に大活躍し、そのブレヒトが晩年を過ごした家が彼の演劇活動に関する貴重な資料とともに現在も残されているような、ブレヒト研究のメッカともなっている街であり、また現在にいたるまで、ブレヒト演劇がさかんに上演されている街でもございます。そういう千田是也とブレヒトの接点でもあるベルリンに、ヴェーバーさんと千田是也の出会いの原点を求めるستطيعのように思われます。

2番目に「日本とのつながり」ということです。ヴェーバーさんはフンボルト大学に入学され、そこでヤパノロギー (Japanologie)、つまり日本学を専攻されました。当時の東ドイツでヤパノロギーを専攻することは、大変なことでした。ヤパノロギーを専攻できるのは、東ドイツ全土で、ベルリンのフンボルト大学だけ、それも隔年募集でしたので、入学する学生が2年間でわずか12人という超エリートで、そのひとりであったヴェーバーさんは、卒業後も、日本の事情に通じた人材として、東ドイツで大変貴重な存在がありました。そして東西ドイツ統一後も、仕事のうえでも生活のうえでも一貫して、日本と非常に深いつながりをもった人生を過ごされております。そういうことでありますので、大変な日本通であり、また日本語にとても堪能な方であることは言うまでもございません。ベルリンに行かれた方で、このヴェーバーさんのお世話をならなかつた方はあまりおられないのではないかと思われるくらいで、千田是也もそのひとりであります。この会場のなかでもヴェーバーさんのお世話をならされた方が少なくないと思います。

3番目が、「日本演劇とのかかわり」です。ヴェーバーさんの大学時代のテーマが、「1927年から1932年までの日本のプロレタリア演劇に関する研究」ということですが、ちょうどこの時期、つまり1927年から31年まで千田是也がベルリンに行っているわけです。この点でまずヴェーバーさんと千田是也の因縁のようなものが感じられますが、ヴェーバーさんはこのテーマにとどまらず、日本演劇全般に対して非常に造詣が深く、日本の演劇界との実際的な結びつきがあり、あちこちの劇団とコンタクトがあり、そのなかで特に関係の深いのが、千田是也ゆかりの劇団俳優座だということです。

そして4番目に「日本留学」です。これまで何度も来日しておられます、1979年から81年、当時の文部省

の奨学生として日本に留学されたことが特に注目に値します。当時東ドイツから日本に留学生として来るというのは非常に珍しいケースでした。また文部省の留学生というのは、国立大学で学ぶというのが通例でしたが、ヴェーバーさんの留学先は私立大学である早稲田大学でした。このことは、演劇専攻のヴェーバーさんにとって当然の選択でもあり、そのときの指導教授は河竹登志先生でございました。そしてこの日本留学時代、ヴェーバーさんのもうひとつの顔が、千田是也の秘書というものでした。

5番目に「森鷗外」というキーワードをあげることができます。1984年、当時の東ドイツのベルリンに、森鷗外記念館が創設されました。ヴェーバーさんはその創設に深くかかわられました。そして現在まで20年以上、森鷗外記念館の仕事に携わり、現在は副館長をつとめておられます。森鷗外記念館はフンボルト大学日本学科に付属する施設です。そのため日本学科の主任が館長をつとめるということになっていますが、それは形の上でそうになっているという面があり、実質的にはヴェーバーさんが、森鷗外記念館の仕事をほとんどすべて、きりもりされているということです。そしてこの森鷗外記念館で、この夏に開催されたのが「千田是也 1904-1994年」という企画展示です。これは早稲田大学の演劇博物館との協力事業でもありました。そのこともあって、ヴェーバーさんが企画されたこの展示会を、私どももベルリンに出かけて見てまいりましたが、特に千田是也のドイツとのかかわりが印象的な、大変素晴らしいものでした。

以上、簡単に紹介させていただきましたが、これからヴェーバーさんの口から、こうした点について、詳しいお話しが聞けると思います。最後に私の個人的なことについて申しますと、ヴェーバーさんとは20数年来の知己ということになります。大変バイタリティがあり、とてもフレンドリーな方であります。私個人もこれまでヴェーバーさんには非常にお世話になっています。そういう縁で、このような紹介役をつとめさせていただきました。それではヴェーバーさん、よろしくお願ひいたします。

講演「千田先生のドイツとの縁（えにし）」

ベルリン・フンボルト大学
付属森鷗外記念館副館長
ペーター・ヴェーバー

只今、ご紹介いただきましたペーター・ヴェーバーです。まず、本日、お話しする機会を与えていただきました早稲田大学演劇学科と演劇博物館（以下演博と省略）の関係者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

Mächtig sind die Toten,
die in unserm Herzen ruh'n,
sind wie Flügel
われらの胸に眠る
死者こそは偉大なもの
重い靴に生えた

in den schweren Schuh'n.

翼にも似て

最近、ラジオでこの詩を聞いたとき、千田先生の笑顔がすぐ目の前に浮かびました。

ご出席の皆様、今日、ここにお集まりになられた方々の中には、千田是也先生の友人や弟子、そして一緒に仕事をしてきた方々など、個人的に、あるいは仕事で、千田先生とつながりがあった方々もおられましょう。また、若い方々の中には、これまであまり聞いたことがなかつたけれど、この演博の展覧会で興味を抱き、演劇に全身全霊を捧げた、この偉大な人物について、もっと知りたいと思われて来られた方々もおられると思います。

ドイツでは、こういう風によくいわれます。「人は、その人を思い出す誰かがいる限り、死んでいない」と。

私は、この20年ほど記念館の仕事に従事して、思い出すことを、いわば職業にしてまいりましたので、追悼行事というものに関わるように運命付けられているのではないかでしょうか。（これは皮肉ですが。）

これまで、千田是也のためのさまざまな催し物が開かれてきましたし、これからも続くことでしょう。今日、ここで伝記のエッセンスをお話したり、業績の学術的な評価をすることは期待なさらいでください。彼の演出や出版物のリストを読み上げるだけでも、私の講演の時間を越えてしまいます。また、実際の学術的な評価をするには、まだ早すぎるとも思っています。10年というの短い時間であり、きちんと回想するためにはまだ充分ではありません。後の世代が研究の材料に必要なもの全てを、演博が大事に保存していくことが、大切なことだと思います。

今、開かれている催し物が、一つの始まりとなるように、私は、この場をかりて、千田先生との個人的な交わりや思い出をお伝えしたいと思います。

そうはいっても、厳密に考えれば、私は生きた千田先生を1年半ほどしか知らず、彼の生涯のわずか1パーセントを分かち合い、認め、議論をし、共に仕事を進めたに過ぎません。それでも、その一縁の時間は、途方もなく密度の濃いものでした。その直接の体験のなかから、いくつかを紹介して、私の触れた千田是也という人間、演劇人について一つの姿を描いてみることにいたします。

千田先生のお嬢様、中川モモコさんのご好意により、私は、今、ここ東京で、千田先生のお宅に泊まらせていただいております。このお宅にこの前伺ったのは、もう23年も前のことです。全く同じ場所なのですが、やはり全然変わってしまいました。数えきれないほどの本、メモ、記事、天才と呼ばれる人しか支配できない混沌状態（カオス）が消えただけではありません。人間千田是也、日本の新劇の大先生がもはや存在しない。その事実を私は突然さとりました。

私たちがこの家で出会った当時、千田先生は75歳でした。私の父親、むしろ祖父のようだったといってよいでしょう。私は25才で、大学で日本学の勉強を終えた

ばかりでした。千田先生は、フンボルト大学日本学科の私の先生、斎藤瑛子教授とユルゲン・ベルント教授の親しい友人の一人でした。この方々は、1968年、ベルリンで「プレヒト対話」が開かれたとき、千田是也氏、観世栄夫氏、朝倉撰氏、岸輝子氏や他の人々の通訳をしています。私はドイツの東側の出身であり、日本の文部省の奨学金を得て國を離れることのできた、東ドイツ最初の女子学生でした。フンボルト大学で勉強中、私はずっと日本のことを見ていた。卒業論文では、日本のプロレタリア演劇運動について書きました。そして、このテーマを今度は学位論文で深めるつもりでした。そのために、私は日本に来て、図書館で調べ、とりわけ専門家たちと話をしなければならなかったのです。日本の新しい母校としては、初めから早稲田大学しか対象になりませんでした。早稲田は、当時、演劇科のある唯一の大学であり、図書館という宝庫をもつ演博ももっていたからです！

私は、学問的に専門を深めるために来日した一方、祖国を離れ、異なる文化を自分の目で見る機会を得た一人として、道徳的な義務感も強く感じていました。何でも吸収して、できる限り多くのことを理解して、国に帰ったら、外に出られない人たちに詳しく正確に伝えなくてはならないと思っていました。勉強に集中しようという気持ちと、さまざまなことを体験しようという気持ち、つまり眞面目な大学生と、好奇心旺盛な若者が、私のなかで、奇妙に混ざり合っていたと思います。やがて「野次馬根性」というあだ名が、私につけられてしまいました。

私の前に開かれたいくつかの道の一本が、千田先生に通じていました。といっても、すぐに会えたわけではありません。理由の一つは、偉大な千田是也先生に対してのおそれがあり、最初の訪問を約1ヶ月延ばしたこと。二つ目は、「類は友を呼ぶ」という言葉のとおり、千田是也という人間と「千田グループ」を分けることは大変むずかしいということでした。個人的に会わなくても、彼の友人や弟子たちを通して、間接的に、千田是也にもう出会っていたといつてもよいでしょう。彼は、巨匠にふさわしく、どこにでも彼の存在を感じられました。

私は、学生時代から、ベルリンに研究や客演で訪れる日本人の通訳を数多くこなしており、自然と何十年にもわたって築かれてきた文化や演劇の日独の交流の大きなねりに身を預けたのは、幸せなことだったといえます。私は日本と東ドイツの文化交流の開花期を、東ベルリンにいながら肌で味わうことができたのです。

初めて日本の地を踏んだ時の印象は、何もかもが新しく未知の地についたと感じられるとともに、また、一方で、先程申し上げましたように学生時代の通訳の仕事を通して、すでにこの地に知人が多くあり、親しみもあるという感じでした。なぜなら、20年代から60年代に千田先生が張り始めたネットワーク、友人知人の網に私が受止めてもらえたからです。そして、自分自身の道を

見出すにあたって、先生のネットワークから大きな支援をいただきました。

このように、千田先生に直接お目にかかる前に、彼の後継者であり、次の世代のプレヒト研究者である、岩淵教授、越部教授、五十嵐教授をはじめ、大勢の方々が私の面倒をみて下さいました。また、よく研究会や芝居の上演に招いてくださいました。ですから学生寮の仲間たちは、来日の一週間後には、うらやましそうに言ったものです。「予定のつまつた君の手帳、僕らもいつか欲しいなあ」と。秋葉教授と市川教授は、同じ時期、入れ違いにドイツに滞在していましたし、丸本教授は、ちょうど2年の研究滞在を終えて、ベルリンから戻ったばかりでした。

また、それに加えて、学業のかたわら、最初からたくさん実践的な仕事があったこともお伝えしなければなりません。私は、翻訳を少し手伝ったり、東ドイツの演劇の実情について、絶好の話し相手としてよく質問を受けました。1979年秋には、母国ドイツの演劇人たちが続々と来日しました。フンボルト大学のシューマッハー教授が、4ヶ月間日本に滞在、東ドイツ労働演劇の代表団が、東京の労働演劇祭に参加、芸術アカデミー総裁のコンラート・ヴォルフ氏、演出家のギッタ・ニッケル氏が、東京の東ドイツ映画週間のために滞在、そして12月には、1981年に予定された待望の日本公演の打ち合わせで、ベルリーナー・アンサンブルの製作担当者と舞台監督が来日しました。どれも、お世話をしたり、通訳をしなければならなかったのです。千田ファミリーは、皆、動員されました。とくに、芝居のあととの討論は、夜おそらくまで続き、私たち通訳者は、疲れきました。私は早稲田大学のセミナーに出る時間を確保するために、大いに骨を折ることになったことは、いうまでもありません。

ただ、留学してすぐに、このようなさまざまな仕事や活動に携わったお陰で、演劇に関する日本語速習コースを言ってみれば無料で受けたことになります。といっても、上演中、シューマッハー教授から、ひっきりなしに「今、何といったのか？」と尋ねられて、答えるのは、なかなかつらいものでした。（ただほど高いものはない！）

そして、ついにその時がやってきました。1979年11月、本物の千田是也と初めて会う日です。私は、ひどく緊張していました。六本木は全く知らない町でした。千田先生の家のすぐ手前に、サーティワンのアイスクリーム屋があって、そこに寄ったことを覚えています。（ところで、その後再三、千田是也との思い出をアイスクリームと結びつける人たちに会いました。これは演劇史上のトポスの一つではないでしょうか？）こうして、私は、大きなパイナップルナッツのアイスクリームを食べ、勇気を出して、千田邸のベルを鳴らしました。ドアを開けたのは、伝統的な芝居のなかの、まるで獅子のようなたてがみをもった白髪の男性で、その髪はヘアバンドで束ねられていました。着古して、楽なトレーニングウェアの姿は、かの有名な千田是也そのものでした。

1932年のメリッカースの配役は別として、すでに私の生まれる2年前の1953年に、日本ではじめて、正統派のブレヒト舞台上演とされた作品『第三帝国の恐怖と貧困』の場面に登場するその人でした。私は、一瞬、畏敬の念におののきましたが、私たちの間に違和感というものは全くありませんでした。彼はとても親切で、中に入るよう促しました。彼はドイツ語で私に話しかけて、私は日本語で答えました。共にお互いの言葉を学びたかったのです。そして、天井まで本が積まれた彼の図書室、書庫というより宝庫に私を案内してくださいました。

すぐ明らかになったのは、彼が集めたもの全てを見て整理するためには、私の1年半の研究滞在では足りないということでした。目の前にある本や書きつけの中に、山のような課題を見たとき、泣きそうになったものです。私の卒業論文に使ったわずかな資料は、友人たちが日本から送ってくれたものでした。千田先生の著作『もうひとつ的新劇史』を読んで、先生が1927年から31年までドイツの労働演劇運動に「一緒に加わっていた」こと、そして東ドイツ映画に出演したことを知り、大変尊敬していました。それは、先生が訪れた国ドイツに実際に携わったからであり、鷗外とは対照的に、ドイツ人の妻と子供までも連れて帰国したからでもありました。

戦後の演劇史全体について、私は何から手をつけたらいいのだろう？先生は、私の困惑した気持ちに気がついて、それをやわらげ、勇気づけようしてくれました。「いつでも、ここに来て、何でも、コピーしていいですよ」とおっしゃってくださいました。それから、私たちは、共通の知人が何をしたとか、私が考えていることや千田先生がそのとき演出をしている作品についてなど様々なことを話し合いました。千田スタジオでは、ちょうど、ハイナー・ミュラーの『戦い』の稽古が行われていましたが、このスタジオにも、私はいつも来てよろしいとおっしゃってくださいましたし、また俳優座についても同じがありました。このことが、後に、また彼の別のネットワークを提供してくれることになりました。

このようにして、全く自然に、直接あるいは弟子の方々を通して、先生は私のために多くの扉を開けてくれたのです。さもなければ、私は外国人として、紹介もなしに、長いこと扉をたたき続けなければならなかつてしまつ。その後、武蔵野の桐朋学園の稽古にも招かれて、松本克平氏や彼が会長を務めていた新劇団評議会の道も切り拓かれましたし、また東北のわらび座にまでも、私を送り込んでくれました。先生がどこかに出かけるときは、私が欲すれば、いつでもついていくことができました。彼は、私にとって、守護天使のような存在であり、たとえ一週間会わなくとも、間接的にいつでもそばにいる感じでした。父親のように面倒をみてくれたといつてよいでしょう。

さらに、訪問したその晩、もう一つ驚くべき申し出がありました。日本の新劇界の大先生のもとには、芝居の招待状が山ほど届きます。それを全て下さるというでした。何しろ、ご本人は自分の仕事で忙しすぎたのです。

それから夕食の時間となり、先生は私に、「特別おいしいものをごちそうしてあげよう」とおっしゃいました。彼の大好きな食べ物、新鮮なエビです。もちろん、私は、それまでエビを口にしたことありませんでしたので、どのようにして食べていいのかもわかりませんでした。モモコさんが、ゆでたてのエビをのせたお皿をテーブルの上におくと、先生は、その一匹をとって、指でカラをやぶり、何か緑色の内臓を出してから、口に入れました。私はそれを見て、正直に言って気持ちが悪くなってしまいました。幸いなことに、あまり危険そうではない他の料理もあって、どんなに助かったことでしょう。これが、偉大な千田と私の最初の出会いです。そして、今でも、エビを食べるたびに、千田先生のことを思い出さずにいられません。

話は戻って、最初は大喜びした招待状ですが、まさかこれで苦労することになるとは、思っても見ませんでした。確かに、一日に2回芝居をただで見られることは素晴らしいことです。それも、千田是也のための名誉席なのですから。しかし、見るものが多すぎました。途中でメモをとっても、一週間もすれば、どこで何を見たか忘れてしまうほどでした。それでもとにかく膨大な資料を集めることができ、ドイツに帰ってから、1980年ごろの日本の演劇の状況についての国内の各地でのスライド講演に役立ちました。

無料のチケット提供に対して千田先生が課した唯一の条件は、見たものについて報告をするということでした。こうして、私は常に自分の目と同時に、千田是也の目で見ることになり、批判的な距離をもつて鍛えられたと思います。先生に私の情報や発見をお話しすると、とても喜んでいただきました。

その後も、先生とは、日本・東独文化協会の集まりや、忘年会、リハーサルと、いろいろな機会にお会いしました。先生は自宅に戻られても、舞台のことを考え続け、食事をしているときでさえ、頭のなかは、舞台の上のあれこれでいっぱいのようでした。いつも驚かされたのは、あまり多くの言葉を使わずに、意図を伝えていたことです。ドイツでしたら、ともかく議論するところでしょう。千田先生はもともと俳優だったので、長いこと理論的に説明するよりも、身振りで示すほうが合っていたにちがいありません。リハーサルのときは、まったく実践者の立場でした。

ところで、千田先生、このことをお話をすることをお許しください。「すばらしき仲間たち」の映画のなかでも確認したことなので、はっきりお伝えできることです。私自身、この目で目撃した事実です。演出家である先生が、リハーサル中に眠ってしまったのです。これは私にとって衝撃的できごとでした。吸いかけのタバコをもった先生の手がだんだん下に下がって、頭がちょっと前のほうに傾くのを見たとき、私は、本当にぎょっとしました。でも、やがてわかったのですが、それが起るのは、決まって彼が必要ではないとき、同じ場面が何度も繰り返して演じられるとき、俳優たちがしかるべきイメージ

を身につけて、もう少しだけ試しているときでした。居眠りは、日本では当然のことのようですが、ドイツではまゆをひそめられます。千田先生は、この居眠りから目覚めると、いつもすこぶる元気で、さえわたり、また新しいアイデアが浮かんできたものでした。

仕事一途の先生に関しては、こんなことも思い出されます。シューマッハー教授は、ベルリンに戻ったら、フンボルト大学名誉博士号を千田先生が授与されるよう力を尽くそうと彼に約束しました。そのために必要なドイツ語の資料を私がまとめて、岩淵先生に借りたタイプで打つことになりました。何度も千田先生と会う約束をとりましたが、何度も拒否されました。稽古が第一優先だったからです。それでも、何とか資料は完成しました。

千田先生との関係には、なかなか複雑な面もありました。1980年2月、千田是也演出の芝居を初めて見たとき、実のところ私は大いに失望してしまいました。日本人作家の作品でした。あまりにも抽象的だったのです。理論的なものを欲していたことはわかったのですが、何か適切な表現が欠けていました。私は心苦しくなりました。先生は、私のパトロンであり、友人であるのに、よくなかったところをきちんと語る気にどうしてもなれなかった。もちろん、すべての演出がうまくいくわけではありません。彼自身もよくわかっていたろうし、私のしかめつらが雄弁に語ったことでしょう。友情や生産的な相互関係には、お世辞やおべっかは関係がありません。しかし、一体どのようにして、大先生に伝えられるというのでしょうか？特に日本では、直接、鋭い批評をするということは、ドイツと違って、一般的ではないのですから。それに、自分で芝居を作るよりも、批判的な観客の目で芝居を消費するほうが、ずっと簡単であること、もちろんわかっていました。

1980年春、私は一時的にドイツに帰らなければならなくなりました。私のたった一人の兄が事故で亡くなってしまったため、お葬式に出るための帰国でした。出発までに2日あったのですが、私はただ呆然としていました。そんなとき、電話が鳴りました。事態を知った千田先生からであり、夜、俳優座の地下のアルゼンチンレストランに来るようとの指示でした。食欲はなかったのですが、とにかく出かけていくと、先生は、やさしく、でもしっかりと私の目をみつめ、こう言ったのです。「起こってしまったことは、大変なことだね。でも、ここは日本ですよ。ここにいる間は、まだ全てが真実ではない。明日ドイツに飛ぶのだから、力が必要でしょう。さあ、食べなさい！」と。そして、私がそれまでの生涯で見た中で一番大きなステーキを注文してくれました。先生自身、肉が大好きで、よく食べ、それもレアが好みでした。「肉と血が力になる。これで、夜の睡眠は2、3時間でけっこう」とよくおしゃっておられました。一番つらかったひとときに、先生がそばにいてくださったことを、私は決して忘ることはないでしょう。

8月に日本に戻ると、皆が心配してくれていましたが、援助の手を差し伸べてくれたのはまたしても千田先生で

した。ドイツからの手紙に返事を書く手伝いをすることになりました。

彼は1979年からドイツ芸術アカデミーの通信会員になっていましたが、通信というからには書くことは避けられません。読むなら苦労はなくても、書くのは厄介ですし、時間を取られます。他にも、ドイツには多数の交友がありました。労働者劇場時代の仲間達やグスタフ・フォン・ヴァンゲンハイムの未亡人のインゲ。1931年のヴァンゲンハイムによる『ねずみとり』の伝説的な上演に千田先生も参加していました。また青春時代に心を通わせたクニオを忘れないマクシム・ヴァレンティンやクルト・トレプテラ。さらにはベルリーナー・アンサンブル、ブレヒト崇拜者や演劇学者達。ですから実際、週に一度は秘書が必要でした。通常はモモコさんがその役をしていたのですが、先生がモモコさんを楽にしてあげようと思ったのか、単にわたしに少し気を付けてくれようとしたのかは、今もって判然としません。

そして、最初の日に、もう、キーを強く打ちすぎてタイプライターを壊してしまいました。先生は笑って「かまわんよ」と言い、もう一台持ってきてくれました。今でもあの時のことを思い出すと気がとがめます。

それまでは観客席からしか知らなかつた、ブレヒト歌いとして名高いギーゼラ・マイヤベルリーナー・アンサンブルの俳優や劇場監督に、千田是也の名で手紙を書くようになり、彼らはわたしの人生の一部になりました。

その年の9月24日、改築した俳優座のこけら落とし公演『コーカサスの白墨の輪』にも先生は私を招待してくれました。それは一つの大事件でした。先生は、土地を売って劇場を建てるという方策を得意げに語っていました。その頃はもう俳優座にそれほど度たび姿を見せることはなくなっていたのですが、このようにして劇場の未来を少し確実にできたことを喜んでおられました。

千田是也演出の当日の『コーカサスの白墨の輪』は、それまでに日本で見たブレヒト作品のなかで、最も優れた上演でした。映画でしか見ていなかった美人女優、栗原小巻を初めから終わりまで仮面をつけて舞台に出すなどということがどうしてできたのか、と驚嘆しました。栗原が美人だからこそ、観客が栗原ではなくグルーシュを見るように、というのが、あのインタビューでの先生の説明でした。幕が下りた後、私達は長時間議論し、帰宅したのは明け方の3時ごろでした。こういうことはよくありました。これも、日本で演劇を研究する留学生にとっての難題の一つでした。夜型で、肝臓が丈夫でなくては務まらないのです。

公演のはなしにもどりますが、白墨の輪のたとえ話には魅惑されました。ただし、序幕のソヴィエトのコルホーズのシーンは納得できませんでした。私は社会主义国の出身ですから、その国の現実も、理論上はよさそうでも実際はうまく行かないさまざまなものも、知りすぎていました。その経験から見ると、序幕は理想化されすぎていました。なぜこの部分を削除するか、思い切って書き換えるかして、もっと現実に近づけないのか、そ

い演劇活動を起したのに対し、ヨーロッパの演劇人は、彼らの伝統演劇の表現に飽き足らず、逆に、日本やアジアのものの中に新鮮なものを感じるということだけではないようです。ヨーロッパの演劇人がしばしばアジアの伝統演劇に、自分が見たいと思うものしか見ていないで、間違った評価をしがちであることは否定できません。この時も、先生は能の時と同じようにすぐ眠ってしまいました。こういう先生ですが、一方で、観世栄夫氏や狂言役者の方々と共同で仕事をし、『近松心中物語』の演出さえしています。日本の伝統演劇を学問的な方法を用いて捉えなおそうとしたのです。1989年にマンフレート・ヴェクヴェルト氏の60歳の誕生日を祝う手紙の中で、こう述べています。「能の形式と技法を真に理解し、それらを現代劇に利用できるようにするためにには、社会心理学、象徴学、生物物理学、生化学などの学間に助力を求めるを得ないでしょう」と。千田是也の尺度と視線は、私とは違います。しかし私達が雅楽に同席したことは事実ですし、確かにあの午後、千田は新しい上演のための幾つかのディテールを目で盗み取ったのです。

私の知る千田是也は、情熱的な収集家でもあり、体系的に仕事をする人、記録する人でもありました。彼がどんな紙切れにでもメモを取り、大量の新聞の切抜きを集め、常に最新の情報を求めて注意を怠らなかったことは、信じられないほどです。日本の演劇に関するものは何でも集め、彼のプレヒトの上演が多数の舞台写真とともにベルリンのプレヒト資料館に保存されるよう気を配っていました。先生は、晩年になっても、ドイツ演劇界の最新の傾向を追うことに力を傾けて、ハイナー・ミュラーの論文などを自分でノートに訳していたほか、若い女性のドイツ文学研究者たちに翻訳を委託し、その仕事が発表されるよう配慮しました。眞の意味の啓蒙家、国際人でした。プレヒト信奉者である千田是也にあっては理論と思索が分離することはありませんでした。これは後の研究者にとって本当の恩恵です。私は長らく手を触ることのなかった箱の中をかき回していて、一つのファイルを見つけました。それは千田先生が別れる時にくださったもので、日本の演劇に関するドイツ語と日本語の新聞の切抜きと、事典の準備作業のような、彼の手書きの文書です。それと、もう一つは、彼手作りの表紙をつけ、彼自身の校正がはいっている千田是也略年譜です。この二つを、私は早稲田大学演劇博物館に寄贈いたします。

ところで、皆さんは多分意識しておられないと思いますが、今日11月4日は歴史的な日です。15年前の今日、ベルリンのアレキサンダー広場で一大デモがあり、クリスタ・ウォルフをはじめ東ドイツの多くの文化人たちが、本当の民主主義と自由を要求する抗議演説を行いました。その5日後、壁は崩壊しました。この劇的な場面、千田先生もきっとテレビの前で食い入るようにジーッと見て、日本の誰よりも感激したと確信しております。私の留学時代はまだ二つのドイツがあり、強固な境界線があったわけです。ドイツ演劇と関わりあった人

にとって大変な時期でした。それでも千田先生は全体を見るまなざしを失うことなく、常に寛容に如才なく振る舞い、両方に手を差し伸べていました。中川モモコさんの著作『日本の父』の中の報告によれば、1983年の『マリア・スチュアート』の初演に、千田先生は両ドイツ大使を招待したことです。彼は東独・日本友好協会と文化協会の会員であると同時に、OAGとゲーテ・インスティトゥートにも関与していました。千田先生は冷戦に关心がなく、他者の内面の問題に介入せず、人々を結び付けることだけを重視しました。

日本の新旧の演劇が互いに接触せず、時には闘争さえあることを私も知っていましたが、それにもかかわらずというより、それだからこそ全ての潮流を故郷に紹介したいとは思っていました。当時はどちらにとっても交流は困難でした。そう思っていたので、大駱駝艦の舞踏公演のあとで、磨赤児が目を輝かせ、敬意をこめて、村山知義を偉大な先駆者として賞賛した時、私は大変驚きました。

佐藤信もまた千田是也への敬意を語り、千田是也の方も同様でした。佐藤信氏が千田先生の弟子だったことは、後で知りました。予想もしないことでした。日本の演劇界の境界線はドイツの境界線とは少し違うようでした。芸術観、世界観は反しても、相手側を個人としては尊敬する。深い感銘を受けました。

日本に来ていくらも経たない頃に黒色テントを知り、一番興味を引かれたのは『赤いキャバレー』でした。二十年代末の『赤いメガフォン』を継承するもののように感じたのです。こちらはまた、千田先生がベルリンを見て、通信員として報告している、メイエルホリドとピスカートアのレビューが基になっています。黒色テントは一番政治意識の高いアングラ劇団であると感じました。

ところが、先生から、以前黒色テントの芝居をいくつか見たが、もう長らく足を運んでいないと聞き、残念でした。私は我にもなく仲介者を演じてしまうところがあります。ある時、能役者の友人を佐藤信氏に会わせました。そこから、韓国の戯曲と道成寺のテーマの触れ合う場面をあわせて作品を作るアイディアが生まれました。今では誰もこの実験のことを覚えていないでしょう。実際、残念ながらこれに続いてなにかが生まれることもなかったのです。ともあれ私は、その稽古の進行を熱中して千田先生に語り、彼は初日にいっしょに行くと約束してくれました。私は「仲人」役をしたことが得意でした。しかし当日、彼は自分の稽古で疲れ果てた、一人で行つてもらいたい、佐藤によろしく、と言うのでした。私の失望は大変なものでした。私の使命は失敗に終ったようでした。

ところが、千田是也展の準備中、ブキさん宛に千田先生が送った資料の中から、黒色テントと佐藤信の公演についての新聞の切抜きがたくさん出てきました。なんということでしょう。23年後に私の早まった誤解が見事にとけたかのようでした。千田先生は、「山は動かない」

をモットーに、自身で出かけはしなくとも、さまざまのことと興味と人並以上の知識をもっていたことを改めて実感しました。

千田先生はいつも若者を愛していました。とはいえた者のすること、考えること、すべてに賛成したのではありませんし、アングラ側からの攻撃にも正当な面はありました。境界線を引くことは自己認識にかかわります。千田先生はよく冗談として「アングラの演劇の仕方はもう築地小劇場の表現主義時代で終わった。それはもういらない」といいました。若者に心を引かれ、俳優学校やプレヒトの会や小劇場で演出する事を好んだおかげで、千田は歳を取らなかったのでしょう。

日本留学から帰国したのち、1982年9月に先生とベルリンで再会しました。私は長女の出産間近でしたが、フンボルト大学の名誉博士号を受けにきた先生にお祝いだけは言いたかったからです。

その後は長く、直接の接触はありませんでした。わたしは母親であり、また森鷗外記念館も一方で育てており、何もかも中途半端でした。壁の崩壊後、大転換が起こり、すさまじい混乱の中にいました。そのころ千田先生は日本・東独文化協会の会長も務めています。これは1984年に鷗外記念館の設立を提唱、支援した団体の一つです。大転換後、記念館の「清算」が検討されたとき、存続のための寄付金の呼びかけに先生も署名してくださいました。

日本からのこのような精神的、財政的な支援がなければ、私達は持ちこたえられず、私は今日ここにいなかつたことでしょう。

ここで、今年の6月10日から8月31日まで森鷗外記念館で開催した「千田是也 1904-1994 — 演劇にささげた生涯」展についてもう少しお話いたします。発端は、2003年11月にモモコさんが『日本の父』という著書をベルリンに紹介したときで、展覧会の構想が自然に浮かびました。

まず、ベルリン森鷗外記念館での千田是也展開催に際して、早稲田大学演劇博物館の坂本麻衣助手の多面的な援助に感謝したいと思います。坂本さんと一緒に仕事ができる幸運な方々にお祝いを言わざるにはいられません。まさに小型の文化交流でした。千田先生がいらしたら大喜びされたことでしょう。

準備中に初めて手に取った資料がいくつかあります。たとえば1968年のプレヒト対話の写真です。1968年、千田先生64歳の時のものです。とてもその歳には見えません。ベルリーナー・アンサンブルの舞台の上で、ピカソの平和の旗の前で、堂々とした魅力的な男性です。終わりの見えないイラク戦争の時代、テロの不安とグローバリゼーションを唱える決り文句のただ中にいて、世界中の文化創造者の平和のためのこのような共同戦線の図を見るとやるせなくなります。

また、ファイルの一つには、ドイツの友人や、20年代、

30年代の前衛芸術運動の生き証人である千田是也に情報を求める人々からの多数の手紙が収められていました。20年代、30年代の造形芸術を卒業論文のテーマに選び、千田に質問表を送った人もいました。ローゼンバーグ博士とは後に展覧会で知り合いましたが、彼は、ル・メルテンの専門家で、ベルリン時代の千田是也とこの文化理論家である並外れた女性との対話や関係について知りたがっていました。1927年から1931年までドイツ労働者劇場で千田先生とともに活動した人々は、クニオを決して忘れず文通を続けていたのです。

外交関係が復活するずっと前から、千田先生はベルリンのプレヒト信奉者達との接触を大事にしていました。1965年、まだ冷戦の最中、先生は34年ぶりにベルリンに戻り、ベルリーナー・アンサンブルで『ガリレイ』等を見て、演劇人と議論をしています。こうして文化面での歩み寄りと緊張緩和の道を開いたのです。

ベルリーナー・アンサンブルの食堂で彼はプレヒトの妻ヘレーネ・ヴァイゲルに会いました。彼女はそこにいたすべての人の前で宣言しました。

「何が起ころうと、私はアンサンブルを見捨てない。」
彼女の言葉は、千田是也の心に深く刻まれました。彼もまた、謙虚な中に、落胆と失望を越えて、あの偉大なドイツの「肝っ玉おつ母」のアンサンブル精神を保っていました。

劇作家ハイナー・ミュラー、フォルカー・ブラウン、ジョルジオ・シュトレーラーと一緒に写っている写真もありました。ドイツないしヨーロッパに多様な関係の網の目が結ばれていたことについては、千田先生が、国内の仕事以外に、どれだけ多くの時間とエネルギーを海外にも注いだかを示しています。

展覧会の期間中に、私は千田是也先生にかわって、ドイツの文通相手数名と握手をしたり、長いこと、話をしたりしました。特に印象深かった二つの出会いをここに紹介したいと思います。

開催して間なしの頃、会場を長い時間をかけてじっと見ている一人の年配の女性がいました。しばらくして、彼女は千田是也のことを子供のときに知っていたと話しかけてきました。この女性はタツコ・レートリヒさんとおっしゃり、千田是也がよく彼女の家に遊びにきて、とても楽しかったことや、ベルリンでは皆、この元気のよい若者を「クレージーな伊藤」と呼んでいたことを語ってくれました。彼女は、国崎定洞の娘さんでした。ベルリンで生まれた彼女は、日本語を話さず、父親の思い出もほとんどありません。父親は、千田是也と一緒にモスクワに呼び寄せられ、スターリンに連れ去られ、殺されたからです。彼女にとって、千田是也は幸せな幼年時代の一部でした。彼女は出席できなかったのですが、千田是也が、彼女の父の100周年の記念行事に出てくれて、友人、同志を忘れなかったことを深く感謝していました。この二日後、千田是也は亡くなりました。

この出会いの数日後、私と同年代の日本人の女性が記念館にやってきました。森茉莉について知りたいと思つ

て記念館を訪れたそうですが、ここで、思いがけず千田是也に出会い、彼女はびっくりして、とめどなく泣いていました。彼女が語ってくれたところによると、彼女の父親は労演の事務局をしていた関係で、彼女も小さな頃から、俳優座と一緒についていました。後に女優になった彼女は、千田是也のお陰で、彼に励まされて実現できたと語ってくれました。観世栄夫、寺山修司、土方巽とも一緒に仕事をしてきた彼女のキャリアは、千田是也から始まったのです。そして、今ではパリ周辺で活躍して、上演の可能性を求めてベルリンにやってきました。この女性の話は、千田是也先生が、いかに人を力づけて、個人の生涯に影響を与えたかを示すよい例ではないでしょうか。これは、年表や学術論文には現れてこない事実です。

そろそろ、私の講演も終りに近づいてきました。千田先生がいたら、とっくに居眠りしていたことでしょう。先生が65歳で最後の舞台に立ったとき、『ファウスト』のメフィストの役でした。劇中「過ぎ去ったというのは、馬鹿な言葉」というメフィストの台詞があります。千田先生は、今でも、私にとって、言葉の本来の意味で、純粋な先生です。時代に合った芸術表現への絶え間ない模索、「表現のためのいきかた」、社会との対決、演劇を手段とした時代と人生への先生の提言を高く評価します。そして、どんな場合も友情を大切にした先生を尊敬します。今日の時代は、ヴェクヴェルト宛の手紙で千田是也が求めたように、「支持するとか非難するという立場の超越、フレキシブルな賢さが...必要です。」“jenseits von Befürwortung und Verurteilung,” “bewegliche Klugheit ... vonnöten.”

もし私が88才になって、千田先生のように新しい恋に陥り、卒倒してしまえば、最高ですね！私にとって、彼の最高の演出は、彼自身の生涯です。ドイツ人の友人を代表して、千田先生、ありがとうございます！

（日本語に翻訳していただいた藤村美織さんならびに野村美樹子さんにお礼を申し上げます。）

シンポジウム「千田是也と私」

秋葉 それでは、本日の最後のプログラム、シンポジウム「千田是也と私」を始めさせていただきます。はじめにお断りしておきたいこと、ご了承願いたいことがあります。千田是也氏を語るさいに千田先生としかお呼びできない方もおられましょうし、そこはそれぞれ自由にお呼びいただいて結構ですけれども、本日のパネリスト同士は、さん付けで呼びあうということにさせていただきます。お手元のプログラムの2ページ目に、パネリストの方々の簡単な紹介が載っております。五十音順になっておりますが、これからその順で紹介申し上げます。まず俳優の小沢昭一さん、劇作家・演出家の佐藤

信さん、演劇評論家の扇田昭彦さん、東京外国语大学教授の谷川道子さん、俳優座の中野誠也さん。この5人の方々をお迎えし、進行役は早稲田大学演劇博物館副館長の私、秋葉裕一が務めさせていただきます。谷川さんは進行役の手助けもお願ひいたします。さて、今年2004年は千田是也生誕百年、没後十年という年にあたります。千田是也の生れた1904年はチェーホフが亡くなった年ですし、はるかに遡りますとソフォクレスの没後2500年という記念すべき年に当たるようです。その年にこのようなシンポジウムを早稲田大学で開催できることは名誉なことであり、また喜ばしいことでもあります。今日は千田是也という「新劇の巨人」の人となり、仕事、業績などを、思い出話とか出会いといったところから始めて、さまざまな面から探っていきたいと願っております。最初のご発言は年齢順とさせていただきます。まず出会いと思い出を中心に、小沢さん、よろしくお願ひ申しあげます。

小沢 独り占めできないので、詳しくお話をできないのですが、戦後間もなく、新劇の芝居を観て歩きました、すべて観て歩きました。ひとつ残らず観て歩きました。そのなかで俳優座が一番面白いなと思っておりましたらば、俳優座が養成所を開設して、生徒を募集するということなので、勇躍受験いたしました。ですから、なんとなく俳優座の養成所を受験したというではなくて、繰り返しますが、数多くの劇団を、文学座も民芸もなにもかもみんな拝見したうえで俳優座を選んだというところに、私の純粋性があるのではなかろうかなと。その頃は純粋でございました。今はグチャグチャですけれども…。そういうわけで俳優座を選んだ動機というのは、あの自殺なさいました堀阿佐子さんが、文学座を捨てて俳優座に移籍なさったのと同じ動機だというふうに胸を張って申し上げたいのでございます。ここから説き起こしますと長くなりますので、どうぞ次の方に。

秋葉 それでは中野さんにお願いいたします。

中野 千田先生の薰陶を受けた大先輩を差しおいて、僕がここに座っているのはなんとなく僭越ですが、まあよろしくお願ひいたします。僕も新劇を観はじめたのは高校時代で、千田先生の舞台にはじめてぶち当たったのもその頃で、まあ新劇の黄金時代と言ってもいいんじゃないでしょうか。民芸の滝沢、文学座の杉村、戦後の第一世代が円熟期を迎えておりました時代で、どの舞台もすばらしい舞台ばかりでした。そんな中で1956年かな、イプセンの『幽霊』というものを俳優座の劇場、六本木の前の劇場で観ました。オズワル役で仲代達矢がデビューした作品で若さにキラキラと輝いていました。千田是矢はマンデスという牧師の役を渋くおやりになっていた。そのあくる年1957年に観たのが『タルチフ』でした。僕はこれにショッキングな演劇的感動をおぼえました。なんといってもまだアリズム演劇が大勢を占めていた時代、仮面のように真っ白に塗った顔、大きな鼻、そして真っ赤なおちょぼ口、高い階段を黒い法服を着た千田是也が一段一段降りていらっしゃる、その